

## 実践報告

### いくつか制限を設けたキャンプ生活が小中学生に与える教育的効果 ～沖縄無人島アドベンチャーキャンプ～

Teaching practice of the camping that I made a limit for gives in a primary and secondary student

～Okinawa uninhabited island adventure camping～

赤嶺 智郎 AKAMINE Tomoo  
国立沖縄青少年交流の家 企画指導専門職

横田 望 YOKOTA Nozomi  
公立大学法人 名桜大学 人間健康学部 スポーツ健康学科 4 年次

#### キーワード

無人島キャンプ 制限 自主的行動 不便・不足 他者との関わり  
自然との関わり

#### 要旨

近年、青少年の課題の一つに人間関係の希薄化やコミュニケーション力の低下が言われており、その原因としてインターネットや携帯電話の普及による情報化・デジタル化といった現代社会の背景が考えられる。このような社会的背景による青少年の課題を解決する手段として、自然体験や集団宿泊体験が重視されている。現に、様々な先行研究によって自然体験の教育的効果は明らかにされてきた。

しかし、今回、研究の対象とする「無人島キャンプ」は、ライフラインが途絶え、食料も自分たちで捕った獲物中心であり、テントもブルーシートを利用した自作のものと、「不便」「不足」な過酷なキャンプ生活である。そういった制限された6泊7日というキャンプ生活では、仲間との協力が不可欠であり、自然をうまく利用しなければ生活できない。このキャンプを乗り切ることで、参加者は生きる技能と自信を身につけるとともに、仲間との関係性の向上や自然への素晴らしさや大切さを実感させられると考える。また、東日本大震災を経て重視されてきている防災教育の面からも災害時において主体的に行動することや、ライフラインが途絶えた状況において生き抜くうえで貴重な体験となると考える。

そこで、本研究では参加者へのアンケートや感想を基に、その効果を検証する。そして、その結果を応用することでより効果的な自然体験プログラムを提言したいと考える。

#### I. はじめに

近年のインターネットや携帯電話の普及は、世界中で情報化、グローバル化をさらに押し進めている。しかし、情報化する社会は、世の中にこれまでなかった全く新しいコミュニケーションの形を生み出す一方で、青少年における人間関係のあり方そのものにも大きな影響を及ぼしはじめています。会話中心だった情報のやりとりや友人との対話も、お互いに顔を合わせることもなくメールの画面上で行うという青

少年が増え続けている。このようなデジタル化していく現代世界という社会的背景が要因となって、人間関係の希薄化やコミュニケーション能力の低下が青少年の課題の一つとしてあげられている。

また、機械化・人工化の汎用による身の回りの全自動化傾向は、生活が便利になった一方で、青少年も含む我々人間全体が、ある物事を自らが直接経験して実際に行っていくという場が減少している。このことは、ある課題や

困難に対して自ら考え、判断、選択してチャレンジしていくという問題解決プロセスの機会を逸していることでもあり、その能力の低下の一因となっている。<sup>(2)</sup>私たちは現代社会の便利な生活に慣れ過ぎた中、本当に必要なモノは何であるかを見極め、日常生活を問い直すことが必要である。

現在、このような社会的背景による青少年の課題を解決する手段の一つとして、自然体験や集団宿泊体験が重視されており、新学習指導要領においてもその重要性が明記されている。平成17年度に、兵庫県南但馬自然学校の調査研究委員会は、国内で実施された1泊2日から6泊7日の自然体験学習の効果について、少年版野外体験事業評定尺度(①自然への感性、②自己判断力 ③リーダーシップ④対人関係スキル⑤自己成長性の5つの因子からなっている。)を用いた効果の検証を行った。この調査の結果から、自然体験学習の日数が長期になればなるほど、各因子において効果が認められている。また、自然体験学習までの自然体験が少ない児童の方がより教育効果があるという結果が報告されている。<sup>(3)</sup>

また、小森(2012)の研究では、小学3年生～小学6年生50人を対象とした5泊6日間の無人島キャンプにおいて、参加者の子どもたちに生起される教育要素としては、下記の点が明らかとなっている。

- (1) 「自然との関わり」の視点から
  - (a) 資源・エネルギー源の大切さや使い方への配慮
  - (b) 「食」と「命」のつながりの理解:「食育」との関連
  - (c) 「必要にして足る—無駄をなくす」精神と実践:「食・水」の認識から
  - (d) ゴミを作らない、増やさない:ビーチクリーン活動からの認識
  - (e) 自然を壊さない、守っていこうという意識
- (2) 「周囲出来事(他存在)との関わり」の視点から
  - (f) 協力・助け合い・思いやりの精神と実践
  - (g) コミュニケーション能力の向上
  - (h) 日常生活での気づき
  - (i) 課題発見・解決能力の向上
- (3) 「自分自身との関わり」の視点から
  - (j) 「心のエネルギー」の涵養及び体験から喚起される現実生活での決意から行動

への進展

- (k) 豊かな心を育む学び(道徳教育)との関連と寄与

小森の研究対象であるキャンプは50人という参加者が無人島において活動的にキャンプを行っているが、人数の多さ等から、組織化されたプログラムでキャンプを行っている。

本キャンプは25名の参加者で、さらに3班に分かれた班を中心としたキャンプのため、1班の人数が10名以下となっている。そのため、キャンプのプログラムは、班の参加者が決めてキャンプをすすめていくことに特徴があり、子ども達が自分達でキャンプの流れをつくっていくことで、彼らの生きる力をより身につけることができる考える。

本研究の対象となる「無人島アドベンチャーキャンプ2012」は、小中学生の異年齢のグループが、ライフラインの途絶えた無人島において「不便」「不足」「不自由」な中で「生きる」ための自然体験を行い、それを乗り越えることで、「自分の力で生きていける」技能と自信を持たせることをねらいとしている。また、その過程で仲間と話し合い、助け合い、知恵を出し合う中で、仲間の大切さや規範意識、社会性・主体性を育成するとともに、慶良間諸島の豊かな自然の素晴らしさを体感するよう展開が図られる。以上の様な取り組みを通して子どもたちが「生きる力」を身につけ、そのことが自己肯定感を高め、さらに自然の雄大さや恵み、仲間の大切さなどを実感できることが期待される。さらに、近年重要視されている防災教育の面からもこうした自然体験から得た「生きる力」は、震災後等の災害時において主体的に行動することや、ライフラインが途絶えた状況において生き抜くうえで貴重な体験となると考える。

この事業の醍醐味は、文明が何ひとつ持たられていない無人島という非日常的環境でキャンプ生活を送ることにある。しかし、今回は生憎の台風接近により無人島には渡れず、代わりにいくつか制限を設けることで無人島での生活に近い「不便」「不足」「不自由」なキャンプ生活を体験することとなった。無人島には渡れないが、野外でのキャンプ生活という非日常的な体験をすることで普段の日常を客観的に見つめなおすことができるとともに、初対面の他者と人間関係を築いていく中でコミュニケーション能力を鍛えることが期待できると考

える。よって本研究では、いくつか制限を設けたキャンプを対象に、参加者のキャンプ事前・事中（4日目）・最終日（7日目）での行動・情緒変容を調査して、キャンプ生活の過程で得られる教育的効果について検証する。

## Ⅱ. 研究の対象と方法

### (1) キャンプの概要

本研究は、国立沖縄青少年交流の家が実施した「無人島アドベンチャーキャンプ2012」の取り組みに焦点を当てたものである。キャンプ期間は平成24年7月30日～8月5日の6泊7日間で、本来、キャンプ2日目より無人島に渡る予定であったが、台風接近の為無人島には渡らず、沖縄青少年交流の家キャンプサイトにて実施した。

参加者の子ども達は、学年が偏らないよう異年齢構成で班編成され、男女比が約半々の一班約8～9人の全3班集体制であった。子どもに密接に関わるのはカウンセラーと呼ばれるスタッフで各班に2名ずつ付いた。カウンセラーとは、各班に所属して子ども達と共に生活をしながら、子ども達の相互作用を高め、個々人と班全体の成長と発展を援助していく重要な存在である。<sup>(4)</sup>その役割は一方的に指示をしたり、手取り足取り手厚く助けたりすることではない。参加者の自主性を重んじ、積極的な考えや行動を促すような、あくまでも補助的なサポートをする姿勢が基本である。キャンプ期間中、子どもたちは特にこのカウンセラーと行動をともにし、カウンセラーは何か困った時の相談役でもある（しかし、答えを与えるのではなく、自分達自身で考える機会を提供する役割となる）。

また、各班の最年長の男女1名ずつが班のリーダーとなり班員を取りまとめた。活動は班別活動が主で、その日の天気や班員の体調等を考慮して班で話し合った活動内容を実施した。主なプログラム概要は以下のとおりである。（表1）

なるべく、無人島に渡る予定であった当初のプログラムを尊重し、下記のようにいくつか制限を設けることで、無人島でのキャンプ生活に近づけた。

表1 キャンププログラム概要

月日（曜）	活動内容		
	午前	午後	日没後
7月30日（月）	オープニング オリエンテーション アイスブレイキング	食材配布 道具・装備品の準備 スノーケリング練習 ビバーク用テント作り	<班別活動> 夕食作り 班長会 班会議
7月31日（火）	<班別活動> 朝食作り	<班別活動> 火おこし 潮干狩り 野外炊事 ビバーク用テント修正	<班別活動> 夕食作り 班長会 班会議
8月1日（水）	<班別活動> 朝食作り <全体活動> 漁港にて魚釣り	<班別活動> 海水浴	<班別活動> 夕食作り 班長会 班会議
8月2日（木）	<班別活動> 朝食作り <全体活動> 漁港にて魚釣り	<班別活動> 漁港にて魚釣り 川遊び	<班別活動> 夕食作り 班長会 班会議
8月3日（金）	<班別活動> 朝食作り	<全体活動> スノーケリング 魚釣り	<班別活動> 夕食作り 班長会 班会議 ソロキャンプ
8月4日（土）	<班別活動> 朝食作り	シャワータイム 県立青年の家へ移動	BBQ 分かち合いの集い
8月5日（日）	朝食：県立青年の家食堂 保護者報告会	解散	

- ①ビバーク（野宿）テントでの生活…ブルーシートを1人1枚配布し、班ごとに協力してテントを作成。台風の影響による大雨の中でもビバークテントで就寝した。よほど被害のひどい班は、避難小屋に移動した。
- ②ガス使用禁止…野外炊事活動はガスを使わず、火起こし器やマッチを使用して焚火を行った。
- ③シャワー室利用禁止、水道使用制限…6日目のシャワータイムまでのキャンプ期間中のシャワーは禁止で、海や川で汗を流したり、雨で頭を濡らしたり、雨水を溜めて服を洗ったりした。水道の使用も制限をして、食器洗いや食材洗いはなるべく海水を使用した。
- ④電気使用禁止（懐中電灯のみ使用）…キャンプサイトの電気はすべて使用禁止とし、懐中電灯のみ使用した。
- ⑤生活計画…食料は各班に必要最小限の量が配られ、1週間の生活計画、献立づくりも班別に任せられた。食料のほとんどが、缶詰やインスタント食品といった非常食であり、その他には、釣りで得た魚などを食料として使用した。

5日目の夜は、班会議にてソロキャンプかペアキャンプを選択してもらった。すると全員がソロキャンプを選択したので、一人一枚ブルーシートを使用してソロキャンプを実施した。6日目の夜は、当初予定していた最終日の豪華ランチタイムを前倒しして、県立青少年の家にてBBQを行った。キャンプ中は無人島生活をイメージして過ごしていたので、食料は非常食など質素な物が多かった。最終夜にBBQを行うことで、色々な種類の食事が食べられる喜びと、作った人への感謝を実感する時間とした。BBQのあとは、全体で「分かち合いの集い」を行い、簡単なレクリエーションで再度交流を図り、各班のリーダーのあいさつ、全体で歌の合唱などを行った。その後、各班に分かれて、カウンセラーと子ども達だけで最後の班会議を行い、これまでのキャンプ生活を一人一人振り返り感想を共有した。最終日、7日目の午前中に、保護者を招いて「活動報告会」を行い、子ども達の活動の様子や感動、成長を家族で共有した。写真のスライドショー、参加者代表あいさつ、そして最後に、各班のカウンセラーから参加者一人一人へアドベンチャーキャンプ達成の賞状が配られた。

(2) 研究の対象

平成24年7月30日～8月5日（6泊7日間）に行われた国立沖縄青少年交流の家主催事業『無人島アドベンチャーキャンプ2012』に参加した、小学5年生～中学3年生の男女25名である。（表2）

表2 参加者の内訳

	小5	小6	中1	中2	中3	計
男子	4	3	1	2	3	13
女子	2	4	2	2	2	12
計	6	7	3	4	5	25

このキャンプへの応募者数は、募集枠を遥かに上回る数であったため、参加申込書の「無人島アドベンチャーキャンプへの思い」という応募者の意気込みの内容や、なるべくキャンプ経験の乏しい応募者の中から選考された。そして選考で選ばれた応募者には一度確認の連絡を入れて、再度子ども本人に参加の意思を確認するという形を取っている。そのとき、友人と応募したが自分だけ選考されたということで不安がって辞退する応募者もいた。そんな中、このキャンプに参加した子ども達はきっと自主的で強い意志を持って参加したと考えられる。参加者の大半は沖縄県出身者であるが、中には滋賀県や愛媛県からの参加者もいた。

事前に、参加者の泳力・キャンプ経験・スキー・ケリング経験を調査した。（図1、2、3）

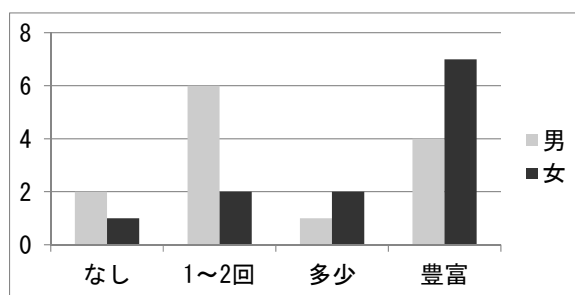


図1 参加者の泳力

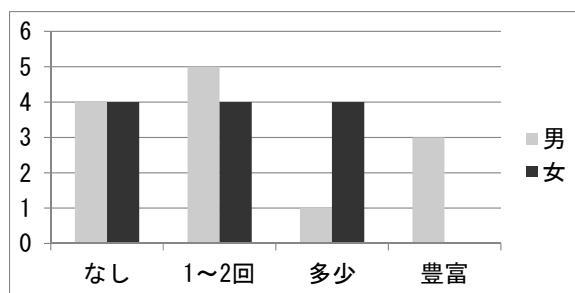


図2 参加者のキャンプ経験

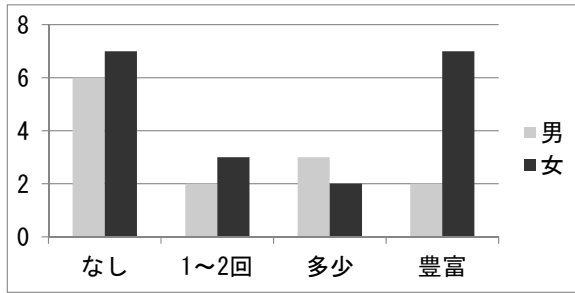


図3 参加者のスノーケリング経験

泳力においては、全体的に泳ぎの得意な子が多く、女子がとても高い。泳ぎの苦手な子は男女合わせて3名であった。キャンプ経験においては、あまり経験のない子が多く、スノーケリングの経験においては男女ともに少なく、参加者の大半はキャンプなど野外活動の体験が少ないことがわかる。

### (3) 調査方法と内容

#### 1. アンケート調査

アンケート調査は、キャンプ事前・事中（4日目）・最終日（7日目）の3回において実施した。事前アンケートに研究趣旨と説明を記載して、任意回答とすることで同意を得た。アンケート項目は以下の14項目で、回答形式は「とてもあてはまる」、「少しあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「全くあてはまらない」の4進法である。

- (1) 新しい友達を簡単につくることができる
- (2) 遊んでいる仲間にあとから加わることができる
- (3) 困っている友達を助けてあげることができる
- (4) 食事をするときは感謝の気持ちを持って食べている
- (5) 料理の手伝いを自分からすすんでする
- (6) みんなのできないような難しいことに挑戦する
- (7) 友達よりうまくできないことがあっても、頑張り通す
- (8) 電気もガスも無い無人島に寝泊まりすることに不安がある
- (9) テレビを見ていないと落ち着かない
- (10) 早く家に帰りたと思う
- (11) 外で遊ぶことは楽しいと思う
- (12) 自然の中の活動は気持ちが良い
- (13) 海で泳ぐのは怖い
- (14) 自然を大切にしたい

これらに加えて、事前アンケートでは、キャンプへの参加動機を①自分で参加したいと思ったから②親にすすめられたから③友達に誘われたからの3つのいずれかを選択してもらった。また、自然体験の経験状況について次のような質問を設け、参加者の実態も調査した。

- (1) チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと
- (2) 海や川で貝を取ったり、魚を釣ったりしたこと
- (3) 大きな木に登ったこと
- (4) ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったこと
- (5) 太陽が昇るところや沈むところを見たこと
- (6) 夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと
- (7) 野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと
- (8) 海や川で泳いだこと
- (9) キャンプをしたこと

さらに、4日目・最終日のアンケートには自由記述欄を設けて、参加者自身の言葉による気持ちや考えを収集した。

#### 2. 観察法

グループ活動が主であり、活動内容もグループによって異なる為、その都度、各グループを回りながら、観察を行なった。特に、初日からあまりグループに馴染めず、1人で活動することの多い子を中心に観察した。また、日々の班長会やスタッフミーティングで話にあがった参加者や班内の様子についても記録を取った。

#### 3. 統計処理

アンケートの回答を「とてもあてはまる」4点、「少しあてはまる」3点、「あまりあてはまらない」2点、「全くあてはまらない」1点として点数化し、事前・4日目・最終日の比較は、対応のあるstudentのt検定を用いて行った。

### Ⅲ. 結果

#### (1) 参加者の参加動機

事前アンケート調査より、参加動機「①自分で参加したいと思ったから」が計20名と、大半の参加者が自主的な動機であることがわかった。

表3 参加動機

	男子	女子
① 自分で参加したいと思ったから	11	9
② 親にすすめられたから	0	1
③ 友達に誘われたから	1	0
④ ①と②の両方	0	2
⑤ 無回答	1	0

## (2) 自然体験の経験状況

参加者の自然体験の経験状況において、経験者がとても多いのは「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと」と、「海や川で泳いだこと」である。一方、経験者が一番少ないのは、「ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったこと」であり、「ほとんどない」人が13名と半数以上であった。また、「海や川で泳いだこと」が「何度もある」人が21名なのに対して、「海や川で貝を取ったり、魚を釣ったりしたこと」が「何度もある」人は9名であり、海や川で遊ぶことは多いもののそのほとんどが泳ぐことを目的にしていることがわかった。

表4 自然体験の経験状況

	質 問	何度もある	少しある	ほとんどない
1	チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと	20	3	2
2	海や川で貝を取ったり、魚を釣ったりしたこと	9	10	6
3	大きな木に登ったこと	14	7	4
4	ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったこと	6	6	13
5	太陽が昇るところや沈むところを見たこと	9	12	4
6	夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見ること	12	11	2
7	野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと	11	8	6
8	海や川で泳いだ	21	4	0

	こと			
9	キャンプをしたこと	9	10	6

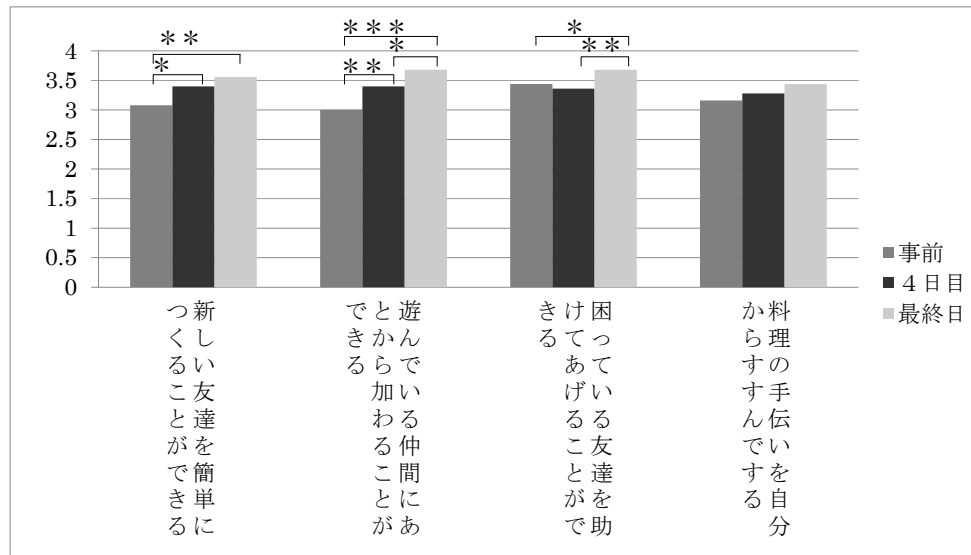
## (3) 他者との関わりについて

「1. 新しい友達を簡単につくることができる」については、事前 (3.08±0.74) と4日目 (3.4±0.63) は5%水準で有意な差があった。しかし、4日目 (3.4±0.63) と最終日 (3.56±0.57) では有意な差はなく、事前 (3.08±0.74) と最終日 (3.56±0.57) では1%水準で有意な差があった。「2. 遊んでいる仲間にあとから加わることができる」については、事前 (3±0.63) と4日目 (3.4±0.63) では1%水準で有意な差があった。4日目 (3.4±0.63) と最終日 (3.68±0.46) では5%水準で有意な差があった。事前 (3±0.63) と最終日 (3.68±0.46) では0.1%水準で有意な差があった。「3. 困っている友達を助けてあげることができる」については、事前 (3.44±0.63) と4日目 (3.36±0.62) では有意な差はなかった。しかし、4日目 (3.36±0.62) と最終日 (3.68±0.54) では1%水準の有意な差があり、事前 (3.44±0.63) と最終日 (3.68±0.54) で5%水準の有意な差があった。「5. 料理の手伝いを自分からすすんでする」については、事前 (3.16±0.88) と4日目 (3.28±0.87)、4日目 (3.28±0.87) と最終日 (3.44±0.63)、事前 (3.16±0.88) と最終日 (3.44±0.63) すべてにおいて有意な差はなかった。(図4)

## (4) 自分自身との関わりについて

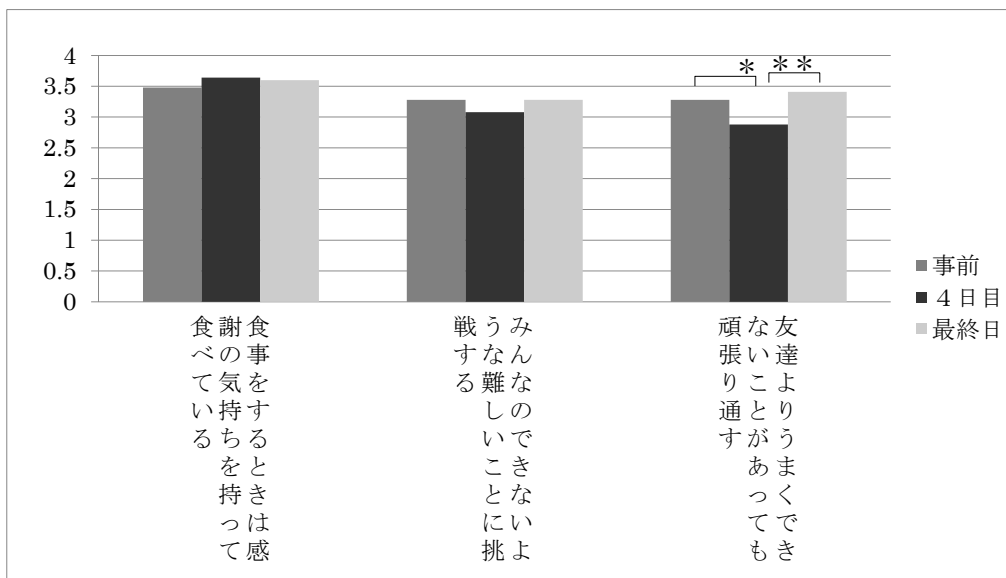
「4. 食事をするときは感謝の気持ちを持って食べている」については、事前 (3.48±0.69) と4日目 (3.64±0.62)、4日目 (3.64±0.62) と最終日 (3.6±0.48)、事前 (3.48±0.69) と最終日 (3.6±0.48) すべてにおいて有意な差はなかった。「6. みんなのできないような難しいことに挑戦する」については、事前 (3.28±0.77) と4日目 (3.08±0.75)、4日目 (3.08±0.75) と最終日 (3.28±0.66)、事前 (3.28±0.77) と最終日 (3.28±0.66) すべてにおいて有意な差はなかった。「7. 友達よりうまくできないことがあっても頑張り通す」については、事前 (3.28±0.72) と4日目 (2.88±0.81) では5%水準で有意な差があった。4日目 (2.88±0.81) と最終日 (3.41±0.64) では1%水準で有意な差があった。事前 (3.28±0.72) と最終日 (3.41±0.64) では有意な差はなかつ

た。(図5)



\*は有意差を表す。( \* : p < 0.05、 \*\* : p < 0.01、 \*\*\* : p < 0.001)

図4 他者との関わりについて



\*は有意差を表す。( \* : p < 0.05、 \*\* : p < 0.01)

図5 自分自身との関わりについて

(5) 非日常的な環境への適応について

「8. 電気もガスも無い無人島に寝泊まりすることに不安がある」については、事前 (2.32 ± 0.83) と4日目 (2.28 ± 0.91) では有意な差はなかった。しかし、4日目 (2.28 ± 0.91) と最終日 (1.56 ± 0.63)、事前 (2.32 ± 0.83) と最終日 (1.56 ± 0.63) において0.1%水準で有意な差があった。「9. テレビを見ていないと落ち着かない」については、事前 (1.4 ± 0.63) と4日目 (1.28 ± 0.72)、4日目 (1.28 ± 0.72)

と最終日 (1.08 ± 0.27) では有意な差はなかった。しかし、事前 (1.4 ± 0.63) と最終日 (1.08 ± 0.27) において5%水準で有意な差があった。「10. 早く家に帰りたと思う」については、事前 (1.88 ± 0.90) と4日目 (1.96 ± 0.82)、4日目 (1.96 ± 0.82) と最終日 (1.92 ± 1.05)、事前 (1.88 ± 0.90) と最終日 (1.92 ± 1.05) すべてにおいて有意な差はなかった。(図6)

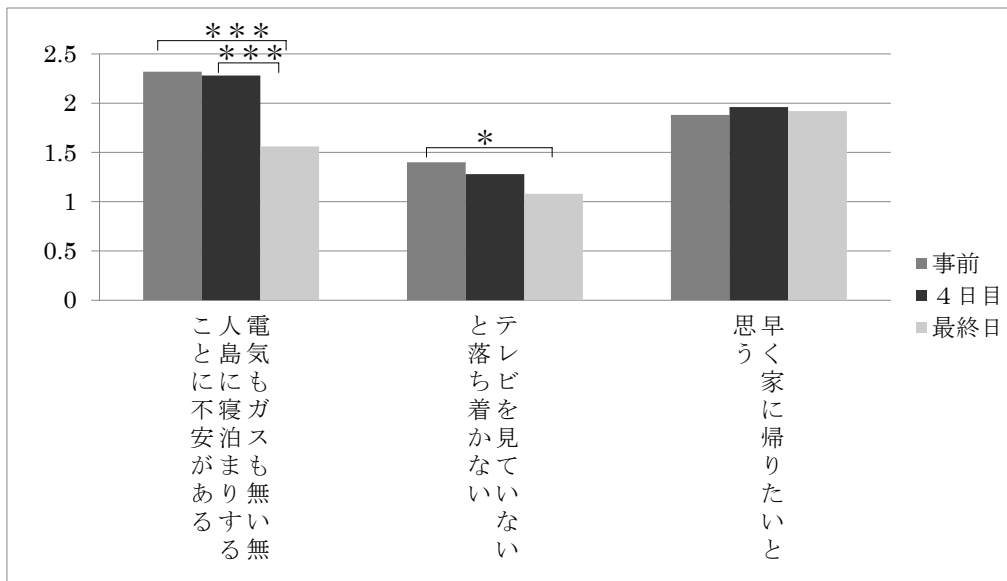
(6) 自然との関わりについて

「11. 外で遊ぶことは楽しいと思う」につい



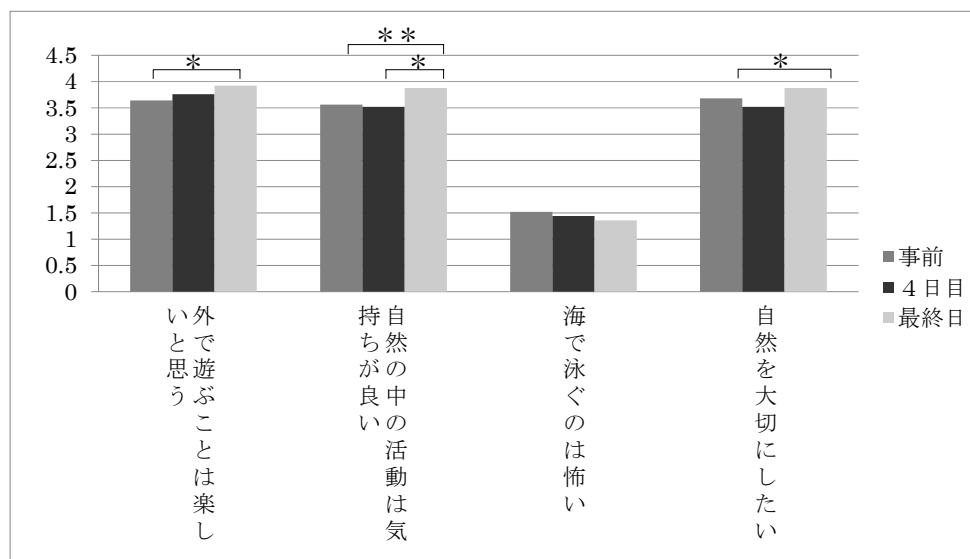
ては、事前 (3.64±0.62) と4日目 (3.76±0.51)、4日目 (3.76±0.51) と最終日 (3.92±0.27) では有意な差がなかった。しかし、事前 (3.64±0.62) と最終日 (3.92±0.27) において5%水準で有意な差があった。「12. 自然の中の活動は気持ちが良い」については、事前 (3.56±0.63) と4日目 (3.52±0.57) では有意な差がなかった。しかし、4日目 (3.52±0.57) と最終日 (3.88±0.32) では1%水準、事前 (3.56±0.63) と最終日 (3.88±0.32) では5%水準で有意な差があった。「13. 海で泳

ぐのは怖い」については、事前 (1.52±0.75) と4日目 (1.44±0.69)、4日目 (1.44±0.69) と最終日 (1.36±0.79)、事前 (1.52±0.75) と最終日 (1.36±0.79) すべてに有意な差はなかった。「14. 自然を大切にしたい」については、事前 (3.68±0.61) と4日目 (3.52±0.85)、4日目 (3.52±0.85) と最終日 (3.88±0.43) では有意な差はなかった。しかし、事前 (3.68±0.61) と最終日 (3.88±0.43) において5%水準で有意な差があった。(グラフ7)



\*は有意差を表す。( \*: p < 0.05、\*\*\* : p < 0.001)

図6 非日常的な環境への適応について



\*は有意差を表す。( \*: p < 0.05、\*\* : p < 0.01)

図7 自然との関わりについて

## (7) 参加者の声

## ①ソロキャンプの感想

子ども達の感想を下記の表5にてカテゴリ一別にまとめてみた。5日目の夜に実施したソロキャンプでは、1人になる寂しさや心地よさを感じたり、自分自身と向き合ってこれまでを振り返ることができたり、とても有意義な時間であったことがわかった。

表5 ソロキャンプの感想

カテゴリー	テーマ	具体的項目
仲間・ 家族	仲間の大切さ	○1人で寝る寂しさ
		○皆と寝た方が楽しい
		○仲間の温かさを知る
自分自身	家族を想う	○母はどうしているか
	プライベートな 時間の大切さ	○1人で寝る楽しさ、心地よさ
		○ゆっくり眠れた
		○自分と向き合い、色々なことを考えた
自然	月	○月がきれい
		○月を見ながら寝る

## ②キャンプ全体の感想

○今回の無人島キャンプでは、全く顔も知らなかった僕らがこのキャンプで知り合い、そして助け合っていくことや皆で協力し支え合うことのできる喜びを感じることができました。1班は皆個性的で明るく、頑張り屋さんの集まりです。このメンバーと一緒にの班になれたことがとても嬉しい。皆で沢山の大きな壁にぶつかることもあったが、この仲間がいるからこそ壁は乗り越えられたし、楽しい生活を送っていたのだと実感しました。(中3:男)

○1日目はほとんど喋らず、辞退しようかと考えたときもあったが、メンバーが優しくて楽しかったので、ずっとキャンプしていきたい。別れたくないと思う。(中2:男)

○最初は電気とか何もない所での活動に不安があったけれど、新しい友達や先生方と関わっていくにつれて、長いと思っていた7日間がとても短く感じた。気が付いたら最終日で皆とお別れしないといけないけど、手紙やメール、いろんな方法で連絡取り合っこの縁を大切にしていきたい。(中2:女)

○学校の友達よりも仲よくなれた。やっぱり、ビルなどの遮るものがあまり無い空間で生きるために力を合わせて、寝食を共に過ごし

たおかげだと思った。ここでできた友達とずっと仲良くしていきたい。(中2:女)

○このキャンプでの目標は人との接し方や友達作りを自分からできるようになることでした。私は今本当に家に帰りたくありません。ずっと友達と一緒に居たいです。このキャンプで学んだことは、家族の次に友達が大切ということです。(小6:女)

○無人島には行けなかったものの、無人島に似せた生活をして、普段の生活のありがたさや自然で生きる方法や大変さなど沢山のことを学べた。(中1:女)

○食べ物があることに感謝したい。家事なども責任を持ってやりたい。(小6:女)

○電気・水・ガスがあるっていいなーと思いました。(小5:女)

## IV. 考察

## (1) 「他者との関わり」の視点から

アンケートの結果より、「新しい友達を簡単につくることができる」や「遊んでいる仲間にあとから加わることができる」では、事前-4日目の短期間においても有意な向上が認められたことから、大半の子ども達はキャンプ前半において、新たな人間関係を築けていたようだ。キャンプ中は班別活動が主であり、テントの設営や食事作りなど一人で進めることが難しい活動がほとんどであった。その為、直接的なコミュニケーションなしでは、協力や助け合い、すなわち生活をするのが困難であり、常に他者との直接的なコミュニケーションが生活や活動上の基礎となっている。それが、7~8名の班という小さなコミュニティ内で実践されて、子ども達の仲間意識が強くなると共に、日々の活動を通して班の仲間との距離が縮まることで、他者との関わりに対して自己肯定感が高まっていったのだと推察する。

参加者の感想からもわかるように、子ども達がキャンプ生活を通して強く感じたことの1つが、仲間との協力や助け合いであり、仲間の存在の大切さである。ある課題や目標を達成するために必然的に仲間との協働の機会が生まれ、共に体を動かすことで自然に協力と助け合いのプロセスが実践されて、実行する中でその大切さや必要性を実感していったのだと推察する。

また、班のリーダーを務めた中学生は、リーダーとなったことで責任感を持って活動に取

り組む姿や自分の班をもっと良くしていきたいと悩み考え、実践していく姿がみられた。班の構成を異年齢構成にすることで中学生のリーダーシップ性が高まり、小学生らはその中学生の姿勢から少なからず影響を受けたことと推察する。

#### (2) 「自分自身との関わり」の視点から

アンケートの結果より「食事をするときは感謝の気持ちを持って食べている」について有意な変化は認められなかった。これは、キャンプ事前から平均点が高かったことが要因として考えられる。しかし、食事の場面においてカウンセラーらが「いただきます」の意味を教えたり、生き物の命をいただくことについての話をしたりすることでより一層食事に対する感謝の気持ちを育むことが期待できる。また、「みんなのできないような難しいことに挑戦する」についても有意な変化は認められなかった。キャンプ中の活動は子ども達の自主性を大切にしていたので、子ども達自身は活動の難易度よりも活動への興味によって行動しており、「難しいことに挑戦する」という意識はあまりなかったのかもしれない。「友達よりうまくできないことがあっても頑張り通す」については事前 - 4日目で低下し、4日目 - 最終日で向上する有意な変化が認められた。事前 - 4日目においては、事前にイメージしていた活動と実際にやってみてのギャップや、まだ周囲に馴染めずに遠慮していたことなどが要因として考えられる。そして、参加者の多くがキャンプ経験や自然体験の経験がなかったため、日を増していくことで初めての体験にも慣れていき、回数をこなすことでできなかったことができるようになって自信もついていったのだと推察する。

#### (3) 「非日常的な環境への適応」の視点から

アンケートの結果より「電気もガスも無い無人島に寝泊まりすることに不安がある」については、4日目 - 最終日にかけて有意な低下が認められたことから、参加者がキャンプ生活の環境に慣れるまでに4日以上期間が必要であることがわかった。

「早く家に帰りたいと思う」については有意な変化は認められなかった。しかし、4日目の夜に『家に帰りたい。』とスタッフに訴え、元気もなくなっていたS君(小5、男)は、最終日には『みんなと1年間キャンプしたい』

というほどまでに気持ちに変化しており、仲間との別れの場面では涙していた。4日以上長期になると特に小学生はホームシックになりやすいのだろう。しかしそこで、簡単に辞退させることなくキャンプに参加し続けさせたことで、ホームシックを乗り越えひとつ成長することができたと考えられる。

#### (4) 「自然との関わり」の視点から

アンケートの結果より「外で遊ぶことは楽しいと思う」、「自然の中の活動は気持ちが良い」、「自然を大切にしたい」について有意な向上が認められた。子ども達は、普段の日常とは違う大自然あふれる環境の中で自然の魅力をおおいに肌で感じる事ができたのだろう。また、その大自然の環境下で「不便」「不足」な生活を体験したことでより一層、資源や物の大切さも感じる事ができたのだと推察する。

#### (5) 総合的な視点から

新しい人間関係の構築、釣りや火起こしなど様々な初体験、そして1週間もの野外宿泊体験を乗り越えたことで子ども達の心に大きな達成感が生まれ、自信や自尊心といった自己肯定感が高まったと推察する。

### V. まとめ

1. 研究結果より、コミュニケーション能力や自然に対する価値観などに有意な向上が認められ、このキャンププログラムは教育的効果があることがわかった。
2. キャンプでの活動内容は、生きていくための様々な課題が多くあり、それらを解決していく中で、子ども達は自ら考え、主体的に判断し行動していき、「生きる力」を高めるのにとっても有効であったと推察する。
3. 今後は、より高い効果を期待して、1週間以上の期間で実施することを推奨する。

### 参考・引用文献

- (1) 星野敏男(2010)、学校で自然体験活動をすすめるために - 自然体験活動指導者養成講習会テキスト -、国立青少年教育振興機構、pp. 9-10
- (2) 小森伸一、モリナガ無人島生活体験における教育的効果とは何か: 事後感想文に基づくケーススタディから読み解くその可能性、東京学芸大学紀要、

2012、pp. 67-99

- (3) 中野友博、「野外が育む力」～自然の中で、本気で向き合う体験を通して～野外教育の考え方、学校教育での自然体験活動の実際とその効果、びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要第7号、2010、pp. 155. 156
- (4) 森井利夫、野外教育の理論と実際、東京YMCA野外教育研究所、学文社、1996、pp. 85